

ニュース

命名規約とオフセット印刷 (金井弘夫)

Hiroo KANAI: Interpretation of ICBN Art. 30.1 and 30.2

本紙71巻4号、大橋広好氏の「*Bupleurum ajanense*の有効発表とその正しい著者名」の中に、「オフセット印刷による資料で新学名を発表することは1953年1月1日以後は無効である」とあったのが、ちょっと気になった。本誌をはじめ今日の大部分の出版物はオフセット印刷だからである。そこで東京コードの原文を参照してみたのだが、第30.1条は、「手書き原稿の抹消不能な肉筆石版刷(indelible autograph)による出版は、1953年1月1日以前のものは有効である」と読めた。また第30.2条は「抹消不能な‘autograph’」の補足説明で、autographが(英和辞典によれば)肉筆石版刷と限定される用語なので、

もう少し拡大解釈を加えたものと思われる。すなわち、「indelible autographとは手書き原稿をなんらかの機械的、図画的(graphic)手段(たとえば平版、オフセット、金属エッチング)で複製したものをいう」とある。つまりこの二項の趣旨は、手書き原稿の形の出版物をいつ迄認めるかということであり、1953年1月1日以後の印刷手法を規制するものではない。活字が絶滅しつつあり、写植やDTPのオフセット印刷が主流の時代なのでちょっと心配したのだが、命名規約などめくったことがない人間が、よい勉強をさせていただいた。(184 小金井市■■■■■)

新学名の有効な発表と登録制度 (大橋広好)*

Hiroyoshi OHASHI: Comments on Effective and Valid Publication of New Names (Autonyms Excepted) in the Abstracts of IBC XV and on Registration in ICBN Art. 32.1 and 32.2

金井氏の「命名規約とオフセット印刷」は新学名の有効発表とオフセット印刷について誤解の起こることを懸念されている。拙文(本誌71: 231-233, 1996)中の文章「オフセット印刷による資料で新学名を発表することは1953年1月1日以後は無効である」の中で、「オフセット印刷による資料」とあるのは、原稿が(単に縮小あるいは拡大されていることを除き)原形でオフセット印刷されている印刷物、という意味であり、オフセット印刷技術によって新学名が発表されているか否かとは無関係であることは言うまでもない。東京規約30.1条によれば、「1953年1月1日より前に発表された消えることのない自筆原稿によって印刷発表された新学名は有効である」、すなわち、1953年1月1日以後は無効である。ICBN30.2条では「自筆原稿は手書きの資料である」と規定されている。

第15回国際植物科学会議の各発表者がタ

イプライター、ワープロ、パソコンなどで書いたそれぞれのAbstractの原稿は手書きの資料と見なすべきものと思う。このAbstracts(要旨集)は各発表者の作った原稿がオフセット印刷技術によって印刷されている(この中では、それぞれのAbstractごとに字体の種類、大きさ、などが異なっている)。したがって、ここに発表された新学名は、ICBN30.1条によって、有効に発表されたものではないと判定できる。

新学名の有効な発表の問題に関しては、日本植物分類学会の申し合わせ(日本植物分類学会会報4巻2号, 1979; 本誌54巻3号, 1979など)はICBNよりも实际的で、明確である。混乱を避けるために、分類学研究者は国内外に通用している、分類学の原著論文の発表される定期刊行物で、新学名を発表すべきである。

東京規約では、新たに第32.1条によって

「学名（自動名を除く）が正式に発表されるためには、(a), (b), (c), (d)...（省略）...、加えて、第16回国際植物学会議の承認を受けることを条件として、2000年1月1日またはそれ以後に発表される学名（自動名を除く）は登録されなければならない」および第32.2条で、「登録registrationは、国際植物分類学連合によって指定された登録事務局へ、登録されるべき学名がはっきりと認定できる形で含まれている初発表文を含む印刷物を送付することにより、有効となる」と予告されている。もし新学名の登録制が承認されるならば、

日本植物分類学会がこの制度に積極的に協力することが望ましいと思う。協力方法は登録事務局の設置の仕方に応じた方法を選ぶ。例えば、登録事務に地域的な分担を定めることになるならば、アジア地域を引き受け、地域委員会を維持し、新学名の登録と設定および印刷物の管理・保管を分担することで、植物の学名の安定化に大いに貢献できると思う。

（東北大学大学院理学研究科生物学教室）

*本論文は、先行する金井弘夫氏の報文に対して、編集委員会から大橋広好氏にコメントを求めたものである。

Flora Malesiana (三木栄二)

Eiji Miki: Recent Publication of Flora Malesiana

Flora Malesianaはよく知られているように、インドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピン、パプアニューギニアの六カ国に生育する植物に関するすべての情報を網羅しようという、壮大なプロジェクトである。各科の始めにはDistribution, Fossils, Habitat & Ecology, Pollination, Dispersal, Morphology, Vegetative anatomy, Palynology, Cytology, Phytochemistry & Chemotaxonomy, Taxonomyの各項目につきreviewと詳細な文献がつけられている。創刊以来研究のまとまった科毎に順次発刊されており、1992年までにこの地域に生育する種子植物とシダ植物を合わせた298科のうち163科、種の数では16%について出版されている。2000年までにはさらに66の科、50%以上の種について出版される予定である。キク科やラン科など大きな科についてはまだ出版の目処がつかないが、近年生物多様性の重要さの認識と共に、発刊のペースを速めることが検討され、毎年一冊ずつ発刊されるようになってきた。1992年以降の発刊状況を以下に記す。植物分類はもとより、特に熱帯植物を扱う研究施設には常備しておくべき基本文献であろう。すでに発行されているser. I (Spermatophyta), vols.1, 4-12のうちvol.6以降とser. II (Pteridophytes), vols.1,2についてはバックナンバーが揃えられている。発行所はいずれもPublication Department, Rijksherbarium/Hortus

Botanicus, P.O.Box 9514, 2300 RA Leiden, The Netherlandsである。

Flora Malesiana, series I (Spermatophyta)

1992, Vol.11, part 1 (pp.1-226), ISBN 90-71236-16-1, Dfl.75.

Mimosaceae by I. C. Nielsen.

1993, Vol.11, part 2 (pp.227-418), ISBN 90-71236-19-6, Dfl.75.

Rosaceae by C. Kalkman, **Amaryllidaceae** by D. J. L. Geerinck, **Alliaceae** by J. R. M. Buijsen, **Coriariaceae** by B.E.E.Duyfjes, **Pentastemonaceae** by B.E.E.Duyfjes, **Stemonaceae** by B. E. E. Duyfjes.

1994, Vol.11, part 3 (pp.419-768), ISBN 90-71236-21-8, Dfl. 100.

Sapindaceae by F. Adema, P. W. Leenhouts & P. C. van Welzen.

1995, Vol. 12, part 1 (pp.1-407), ISBN 90-71236-26-9, Dfl. 100.

Meliaceae by D. J. Mabberley, C. M. Pannell & A. M. Sing.

1996, Vol.12, part 2 (pp.409-784), ISBN 90-71236-29-3, Dfl. 100.

Caesalpiniaceae by Ding Hou, K. Larsen & S. S. Larsen, **Geitoplesiaceae** by J. E. Laferriere, **Hernandiaceae** by B.E.E.Duyfjes, **Lowiaceae** by K. Larsen,

(ツムラ中央研究所)